人とコミュニティを育む地方都市のまちづくりに関する考察

—住民主体によるまちづくり事業としての「高齢者こんにびに・ばじる」(北海道美幌町)の活動を通して—

A STUDY ON THE COMMUNITY PROJECT BY RESIDENTS IN A RURAL TOWN

—Through the activity calls the aged Konbini Bajiru in Bihoro town, Hokkaido—

倉原宗孝 — *1

キーワード:

まちづくり, 地方都市, 高齢者, 事業, コミュニティ, コンビニ

Keywords:

Community development, Rural town, The aged, Enterprise, Community, Konbini

Munetaka KURAHARA — *1

It is an important theme today to be going to develop town management. And also it is an important theme to grips with the aging of society. These theme are a very severe problem in a rural town especially.

By the way, an activity called Bajiru is developed by residents in Bihoro town, Hokkaido. This activity is a community project that makes town management and aged society a theme. The purpose of this paper is a announcing content of a series of Bajiru project. Through this project people and a community have been fostered mutually.

1. 背景と目的

まちづくりとは、ハードとソフトが、また個人とコミュニティが相互触発・相互発達しながら持続的に向上していくプロセスである。それについて本稿では、一地方都市における住民主体の活動の一連の過程をケーススタディするなかで、内容の報告とともに今日とこれからのまちづくりに向けた意義・効果・課題について考察を行う。

ところで近年、多くの都市の中心市街地が衰退している現状に対して、その活性化をはかる試みが全国的に模索されている。筆者は拙稿で、こうした中心市街地の活性化とともに広く地域づくり・まちづくりを進める上で魅力的な「事業」を展開していくことについて、「北の屋台」(帯広市)の事例を通して考察を行った^{*1}。本稿はそれに連動するものであり、後に示す「高齢者こんにびに・ばじる」(北海道美幌町)という住民主体のまちづくり事業の取り組みを対象にする。

中心市街地の活性化が大きな課題になっているが、とりわけ地方都市におけるそれは極めて緊要である。また今日、高齢化・高齢社会への対応も大きな課題になっている。本稿で取り上げる対象は、こうした社会的背景を踏まえた上でも幾つかの貴重な示唆を持つ。

2. 方法と調査対象

対象とする活動が展開されている北海道美幌町は、北海道東部、網走支庁管内に位置する人口23,436人(平成15年)の地方小都市である。基幹産業は農業であり、かつては隣接町村に対する生活中心都市として賑わったこともあったが、全国的傾向と同様に近年は中心街空洞化・高齢化に悩む町の一つである。

筆者は地区外のプランナーとともに住宅マスタープラン策定に関

わった事をきっかけにして、この町で地元住民と共にまちづくりについて議論・実践する経験を約5年ほど持ってきた。本稿で取り上げる活動「高齢者こんにびに・ばじる」は、その中で育まれたものであり、筆者は先の「北の屋台」の報告と同様にAction ResearcherあるいはParticipant Conceptualizer(参加・参画型研究者)として活動に一貫して関わってきた。一連の活動内容とともに関係各主体及び地域の細部の状況も把握した上での情報と考察である。

3. 「高齢者こんにびに・ばじる」の活動経過と内容

「高齢者こんにびに・ばじる」(以下、「ばじる」)の一連の活動経過・内容を表1に示す。筆者は民間プランナーと共に、この町の住マスの計画策定に関わったが(残念ながらこれらの計画策定は十分な成果には至らなかった)、そのことが縁で地元住民と共に独自のまちづくりを模索することになる。

当初、数名の住民と議論を重ねる中で、街なかの衰退を憂う一方で、かつては地元住民のコミュニティの場であったデパートの存在と意義など幾つかの大切な話題が上る。こうした議論を受けつつ数名の住民が通りを活性化する為に独自にイベントを行うなど模索す

図1. 美幌町の位置

*1 岩手県立大学総合政策学部 助教授・学博
(〒020-0193 岩手県岩手郡滝沢村滝沢字菓子152-52)

*1 Assoc. Prof., Faculty of Policy Studies, Iwate Prefectural Univ., Dr. Sci.

るが取り立てて成果や変化を生むには至らない状況が続いた〈町の衰退・高齢化への模索〉(表1左、以下同)。

こうした状況のなか、町にコンビニが出来るという小さな「出来事」が発生する。そのことも一つのきっかけに、街中活性化やまちづくりに向けたテーマに絡み筆者らは、「高齢者」「コンビニ」等のコンセプトを住民メンバーに投げかけつつ、その意義や方法が議論の中で少しずつ生成していった。〈テーマ・コンセプトの生成〉。

一方、一定の議論展開はあるものの、テーマやまちづくりに対する住民メンバーの意識・認識は十分ではなく、メンバーの触発を目的に先進地視察なども行った。また具体の活動にしていける為にプランナーを中心に補助メニューの調査・獲得がなされ、地元住民メンバーと筆者ら外部専門家からなる「高齢者コンビニ業態開発研究会」(全国中小企業団体中央会補助事業)が発足する。研究会では定期的な議論とともに先進地視察等も行っていた。その中で、体験的イベント実施や他地区のまちづくりフォーラムに参加するなど実践的・積極的な取り組みが少しずつ重ねられた〈実験・学習〉。

メンバー間で少しずつテーマや取り組み方法についてのイメージが共有されていく中で、事業名として「高齢者こんにに・ばじる」(ばあちゃんも、じいちゃんも、るんるん楽しい)が決まる。幾つかの候補物件を検討した後、空き店舗を借りて実験店舗として「ばじる」の運営が始まった。試行錯誤しつつも、次第に地場産物や住民の創作物等が店舗を彩りだし、また地元のボランティアスタッフも参加し始めた。店舗を活用した行政サービス実施やイベント開催など、活動内容も少しずつ広がり軌道に乗り始める。各種報道関係からの取材も出てきた〈実験店舗の開設・運営と試行錯誤〉。

約半年の実験店舗の運営経験の後、団体からの補助も終了し、地元住民独自の自主的な運営が始まる。前年度からの活動に引き続きボランティアスタッフも増え、蕎麦・うどん・漬け物・お菓子等の飲食物、各種創作品等の商品や展示品も日常的に設置されるようになってきた。各取材や視察も相当に増え^{*2}、また幾つかの賞を受賞するなど社会的評価も高まりだした〈持続的運営模索〉。

現在、開店から2周年記念を迎え、未だ課題はあるものの店舗運営も一定の軌道に乗り始めるとともに、街中の活性化・まちづくりの新たなテーマを模索し始めている〈住民の主体的運動展開へ〉。

4. まちなか活性化・まちづくりに対する影響・効果

こうした「ばじる」の一連の活動を通じて現在如何なる影響・効果が見られるか以下に示す。

(1) コミュニティを生成するまちなかの「たまり場」育成

取り組みの当初、住民との議論の中で話題に上った「あそこに行けば誰かに会える」という住民が愛着を持ったかつての地元デパートのようなコミュニティの場を「ばじる」が持続的に再生・生成し始めている^{*3}。とりわけ高齢者にとって、その存在価値は大きいようだ。囲炉裏を囲んでユツタリとした畳ベンチ、食事メニューも高齢者に程良い量とそれ故の値段の安さ、気軽にたたずめる店舗内で世間話と共に様々な情報交換、ボランティアによる楽しい運動やアドバイス等、極めて心地よい場となっている(写真1, 2)。

一方、そうした居心地の良さは高齢者だけでなく多世代・多職種に開かれている。子供や若者が立ち寄り、サラリーマンの休憩や食事の場としても使われ始めた。常連客として訪れる身障者の姿

も見られる。現在、活動の新テーマとして環境教育・体験学習等も模索されているが、「ばじる」が多世代に開かれたまちづくり発信の場としてスタッフはじめ地域住民達により育成されてきている。

また従来、既存施設で十分活用されていなかった行政サービスが、「ばじる」を活用した街中・生活フィールドでの提供に住民にも好評を得ており、行政・住民双方にとって良い効果を生んでいること、同時にそのことが店舗運営自体も活性化していることも注目される。

(2) 住民・高齢者の生きがい・社会的自己実現

「ばじる」の居心地の良さは、空間や設え、商品メニューやイベント等にわたる地元住民の多様な能力還元へ寄るところが大きい。当初広すぎるのではないかと思われた空間も様々な造作物や作品で賑わっている(写真5, 6)。一方、食事メニューをはじめ専門的な知識・技術を伴った運動や遊び等の提供もあり、いずれも高い評価を受け好評である。また主婦を中心にしたボランティアスタッフは現在延べ20名程に上り、店舗運営の極めて大きな力になっている。

こうした労力が、いずれも提供者本人の能動的な楽しみ・生きがいになっている点に注目したい。地方都市において、自らの趣味の作品を披露する場は限られるが、「ばじる」が日常的な発表の場を与えている。主婦や高齢者の余暇時間を創造的・貢献的な活動に昇華している。現役を引退した高齢者の専門的知識・技術が来店者を魅了している。一方で来店者からの楽しみ・欲の反応や高い評価が、提供者自身の新鮮な楽しみ・生きがいになっている。同時にそのことが持続的な労力や作品提供に繋がっている。

ここには、運営者と来客、生産者と消費者、また専門家と生活者、あるいは介護する者とされる者といった主体の枠組みが「ばじる」の活動・場の中で有機的・能動的に結び合われる中で、そのハード・ソフト両面が緩やかに高められる状況が育まれてきている。

(3) ハード整備や地域経済への漸進的インパクト

活動を通じて直接・間接的に街並みや空間へも個性的で柔らかなインパクトがもたらされつつある。とりわけ空き店舗の有効活用は、衰退する街中の再生への萌しを住民や地元各関係者に与えている。内外の反響を考えると今後、線・面としての整備展開も目論まれる。

一方、地域への経済効果も活動を通じて少なからず高まっている。撥ね物の野菜や一般店では売れ残った商品が売り手・買い手双方にとって有益な売買として交わされたり、高齢者の知識・経験も活かしつつ新たな商品開発に向かったりと、小さいながらも活動や地域のための収益が生まれている。例えば2年目の自主運営に入り経営が危惧されたが、収益から家賃・水道・光熱費は賄えられ活動を維持できる状態になった。NPO・ボランティア団体等の運営維持が模索される今日、また大量生産・大量消費に抗する現代ゆえに、こうした小さいながらも住民の主体性ともなう活動の収益及び地域への効果には見逃せない示唆がある。

(4) 一人ひとりの自己の発達とまちづくり・コミュニティ形成

「ばじる」の一連の活動を眺めた上で重要な点の一つは、関わる個人の人格が緩やかに、しかし着実に成長していることだ。特に中心的キーパーソンの「まちづくり人」^{*4}としての成長は大きい。

活動当初、筆者ら外部専門家側からは意識・イメージを喚起させようとする発言・行動を幾度も投げかけたが、その反応はなかなか十分なものには至らなかった。メンバー各人の意識・認識・主体性もあまり窺えず、またそれ故に地元メンバー間の連携も十分ではな

表1.「高齢者こびに・ばじる」の活動の経過と内容

	経過・内容	効果・変化	課題	観察・備考
1999 H.11	<p>町の衰退・高齢化への模索</p> <p>＜背景＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元役場・商工会を中心にした街の活性化・まちづくり模索 ・お年寄りをはじめ住民の集い・憩いの場であった美幌デパートの閉店 「昔は美幌デパートに行けば誰かに会えた…だけど今は…」のお婆ちゃんの話 ・中心商店街活性化のために地元商店主・住民の独自の議論・活動（少人数） 通りを使って独自のイベント等 ・中心地のガソリンスタンドが廃業し替わって町にコンビニができた 冗談混じりの会話でコンセプト・キーワードの一つとして「コンビニ」が →「高齢者コンビニ」のテーマ胎動 ・町のTMOの動き、住宅マスタープラン ・地元メンバー有志による全国先進事例の視察調査（京都介護ショップ、おたっしや本舗、あじろぎ横町、真野まちづくり・ふれ合い住宅、等） 			<p>→なかなか展開しない</p> <p>地元住民の危機感、認識・意識低い</p> <p>→住民有志による自主的取り組みは評価されるものの効果的な動きにはいたらず模索</p>
2000 H.12	<p>→高齢者コンビニ実験事業の構想、補助メニュー等の調査・検討・申請</p> <p>・「高齢者コンビニ業態開発研究会」発足（全国中小団体中央会補助事業）</p> <p>以後、月に1回前後のペースで議論・活動</p>	<p>◇一部のメンバーの意識・認識は育まれつつあるものの未だ弱い</p>		<p>②この時点では地元メンバーの意識・認識は低い中、外部専門家も交えた委員会結成とそこでの議論・実践が当初の活動展開の資格になった。</p>
10.	<p>・先進地視察調査（大阪平野まちづくり、足助町百年草・三州足助屋敷、三重県高齢者生協）</p>			<p>③外部プランナー・専門家と地元住民の意見が呼応する中でテーマ・方法のイメージが生成していった。特に「生活」「記憶」といった内容が議論を活性化させた。</p>
11.	<p>・商店街の声集め調査</p> <p>・まち歩き調査</p> <p>・「畳」を活用しよう、「老村」（ローソン）でなく「老孫」で等のアイディア</p>		<p>◇商店街における反応はあまり良いものではない</p>	
12.	<p>・畳イベント（通りの一角に数枚の畳をひき非日常的な楽しい体験）</p> <p>高齢者のたまり場としての薬局、布田屋さんのご隠居等、貴重な声吸収</p> <p>・外部講師を招いた講習会</p>	<p>○メンバー内外の意識の活性化</p> <p>○畳イベントをきっかけに新聞報道</p>		<p>④畳イベントなど体験的な取り組みがメンバー内外の意識触発と目標の共有に効果的なインパクトをもたらした。</p>
2001 H.13	<p>・岩見沢市でのまちづくりフォーラム参加</p> <p>・対象候補物件（空き店舗）の浮上</p> <p>・「高齢者コンビニ・ば・じる」のネーミング決定（ばあちゃんも、じいちゃんも、るんるん）</p> <p>・実験店舗決定（中心街の一角、約60坪）</p> <p>・「協同組合高齢者こびに」設立（メンバー：地元住民6名）</p>	<p>◇想定していた以上の広さに空間を使いこなせるか不安</p> <p>→</p>	<p>○他地区まちづくりとの連携・触発</p>	<p>⑤この間2年間ほど活動に参加してくれた地元大学（東京農大網走校）学生数々の存在が、各イベントや運営に、又若い世代の視点からの活動触発に貢献していた。</p>
8.		<p>○組合結成をきっかけにメンバー各人の意識・認識・行動が高まってくる</p>	<p>⑥一方で、住民メンバーによる（特に大がかりなわけでもない）日曜大工的な造作物や地元の知り合いの趣味の作品等が次第に空間を彩り、結果としては狭いくらいの賑わいを演出。</p>	<p>⑦組合結成がメンバー各人の自覚と目標イメージの喚起・共有の大きなきっかけになった</p>
10.	<p>・「ば・じる」実験店舗としてオープン（毎週土・日営業）</p>	<p>○保育園・幼稚園児たちによるおじいちゃん・おばあちゃん顔の似顔絵を壁に展示</p>		<p>⑧活動の地元キーパーソンは、この実験店舗オープンの経験と反応に「これは行ける」と感じた。</p>
11.	<p>・「ばじる通信」（A4 1枚程の通信紙）発刊（以後2ヶ月に1回ほど）</p> <p>・先進地視察調査（レストラン・サラ、赤岡冬の夏祭り）</p> <p>・地元情報誌伝書場による情報発信、チラシ</p>	<p>○しめ縄作り、お漬物など、やってくる高齢者の技が場を賑わし出す、少しずつ常連メンバーに</p> <p>○「日曜日は病院も休みだし、金曜日に開いていたらしいのに」の高齢者の声を受け土・日から金・土曜日の開店へ変更</p>		<p>⑨活動全体を通じて数回の先進地視察を行ったが、具体的な活動（店舗オープン後）を始めてからの視察経験が情報・意識触発の上で大きな刺激になった（逆に、最初の視察ではその意図・意義が十分理解できていなかった）とメンバーは振り返る。</p>
12.	<p>・「ばじる」を利用した各種行政サービスの実験の実施</p> <p>保健婦による健康相談、交通安全講習会、在宅介護支援センター相談窓口等（以後定期的に）</p> <p>・テレビ・ラジオ取材が増えてくる</p>	<p>○報道関係の取材が少しずつ増えてくる</p> <p>○従来施設で行われていた保健婦さんの健康相談をばじるで行うことに、参加者も増え店・高齢者・保険業務にどう互いにより結果に</p>		<p>⑩活動全体を通じて数回の先進地視察を行ったが、具体的な活動（店舗オープン後）を始めてからの視察経験が情報・意識触発の上で大きな刺激になった（逆に、最初の視察ではその意図・意義が十分理解できていなかった）とメンバーは振り返る。</p>
2002 H.14	<p>・クリスマスイベント</p> <p>巨大ケーキ作り、お雑煮作り</p> <p>・「縁側サミット」実施</p> <p>・「わら細工、蕎麦打ち、しめ縄、交通安全講習会、健康相談、運動療法、救命救急講習会、等の小イベントを実施、（以後定期的に）」</p> <p>・実験的に1週間毎日営業ある程度の成果が確認される</p>	<p>○町交通安全協会の安全教室開催・物品配布の場として活用</p> <p>○地元主婦ボランティアメンバーの参加、次第に定着（約20名）</p> <p>◇「高齢者こびに」のネーミングに抵抗感の声も</p> <p>→「ふれあいこびにば・じる」のちに</p> <p>◇幅広い高齢者への浸透には至っていない</p> <p>◇営業日、イベント等の課題</p> <p>◇コミュニケーションの場として多世代・子供達の関わりをどう促進するか</p>		<p>⑪行政サービスも既存施設では利用者が少なかったのに対しばじるの活用による実施にサービス利用者増える、行政と活動（ばじる）双方にとって良い効果に。</p>
2.				<p>⑫地元住民の趣味の活動・作品披露の場としての店舗活用が定着し出す、住民・活動の双方に良い効果。</p>
3.	<p>・「高齢者こびに ば・じる」自主運営スタート（本格的な運営展開へ）</p>			<p>⑬運営は厳しいものの少しずつ広がる来客者、ボランティアスタッフ、他地区からの評価を受け緩やかに活動持続。</p>
7.	<p>・蕎麦うち販売イベント</p> <p>・来町した音楽家による出前コンサート</p>	<p>○北海道北のまちづくり賞（知事賞）受賞</p>		
10.	<p>・一周年記念イベント「ば・じるまつり」実施</p>	<p>○各団体の視察、事例紹介等の講演依頼が増えてくる</p>		<p>⑭キーパーソンの活動（ばじる）展開やまちづくりに対する意識が極めて成長していることを実感する、又他のメンバーに対するさり気ない配慮や連携姿勢など、まちづくり人としても大きく成長している。</p>
11.	<p>・「ばじる・まちづくりコンクール」開催</p> <p>町内外から36提案</p> <p>アイディアと共に今後の活動へ向けた人材発掘</p>	<p>◇スタッフ体制、情報発信のあり方・方法</p> <p>○町内で独自に活動模索していた住民もメンバーに</p> <p>○読売新聞北海道支社北のくらし大賞（準大賞）受賞（各賞含め社会的な評価）</p>		<p>⑮メンバー各人の意識・認識、チームワークも緩やかに発達、同時にメンバー外の住民の積極的な参加や意識・行動の高まりも波及してきている。</p>
2003 H.15	<p>・コンクール優秀賞受賞者とともに先進事例視察</p> <p>・各章受賞も記念した「ば・じるまつり」実施</p>	<p>○先進地視察に刺激されて町長に手紙を出す新メンバーも</p> <p>○地元行政・商店街の関心・認識は未だ低い</p> <p>○国土交通省まちづくり大臣表彰受賞</p> <p>○北海道新聞北ののみらい奨励賞受賞（賞金100万円獲得）</p>		
1.		<p>○ばじるの活動とともに新しいテーマにも拡大していこうとするメンバーの発言・行動</p>		
6.				
10.	<p>・二周年記念「ば・じるまつり」実施</p>			

※一連の経過の中で大小様々な活動展開・出来事や人々の意識変化があったが、下線は特に節目となったと思われる事項を示す。

く活動・組織全体としてコトはスムーズには進まない面も多かった。

一方、緩やかにではあるが、又筆者の観察ではとりわけ「協同組合」を結成した頃から、一人ひとりの主体性と、同時にメンバー全体の連携が柔軟に発揮されるようになっていく。特に上記の地元キーパーソンへの食欲とも言える積極的な学習姿勢の高まりは、現在では活動の節々で状況に応じた取り組み方法を能動的に探り出すようになってきた。とともに住民・各団体に対しても「ばじる」が狙うまちづくり・コミュニティ生成の目標・意義を明確に伝える力が培われ、そのことも対外的評価の高まりにつながっている。さらに他のメンバーや関連団体にも時にはさり気なく目を配りながら巧みに調整する態度がコトの柔軟な展開に大きく寄与している。

またテーマの普及と新しい人材発掘などを目的に行った「ばじる・まちづくりコンクール」では、貴重な示唆的な提案や情報とともに、活動テーマと意志を共有する町内に潜在していた人々も取り組みに

紡ぎ出されてきた。

これらには、活動と共に自分自身に誇りと自信を持った個々の一人ひとりが、同時にそうした人々が結び合い広がるコミュニティが、漸進的に育まれてきている。

5. 「ばじる」の活動にみるまちづくりに向けての意義・意味

こうした「ばじる」の一連の取り組みを通じて、今日とこれからのまちづくり・コミュニティ形成に向けて如何なることが言えるか。これについて筆者は先の「北の屋台」の考察で幾つかの要件を示した。「ばじる」の活動内容にも共通する点があり、それについては割愛するが、一方この活動において特徴的だった点を以下記す。

(1) 問題や出来事から生成する魅力的・個性的なテーマ・方法

今日、高齢化・高齢社会は全国的な課題だが、一方「ばじる」ではそこから魅力的・個性的なテーマ・方法を生成している。

図2. 「ばじる」の立地状況

写真1 ばじる店舗内の様子(開店当初)
街中のくつろぎの場にやってくる人も少しずつ増えていった。手前には地元農家からの撥ね物の野菜、中央に囲炉裏・移動式畳ベンチ奥に畳の座敷と手芸創作等のコーナーがある。

写真2 囲炉裏を囲みくつろぎの時間が流れる
活動当初の議論からあった「火を囲む場が欲しい」「畳を是非活かしたい」等の内容が店舗に活かされた。来客に極めて好評な場だ。移動式畳ベンチも好評で、他町からの注文も出た。

◎祖父母の似顔絵

幼稚園・保育園児が描いたおじいちゃん・おばあちゃんの似顔絵が壁面広く飾っていた。現在は各種ポスターに。

◎ボランティアによる様々な活動
住民ボランティアにより健康相談・心身機能活性療法あるいは切り絵・しめ縄作りなどが常時、季節ごとの内容で行なわれている人気の場所に。

◎そば打ち実演

ボランティア住民が趣味のそば打ちを。打ったその場で販売され好評。ソバを食べるために、昼休みに訪れる近隣の会社員の姿も見られる。

◎トイレ

既存の空き店舗を安く改修したため配管設備が不十分。冬場は非常に寒く課題に。

◎厨房

既存の空き店舗活用のため、換気システムに問題あり。食べ物の売り行きも良いゆえ、広く充実した設備が求められる。

◎レジカウンター

季節ごとに地元美幌産の野菜が安く販売。人気商品で、毎回売り切れる。町役場から無料配布された杖も。

◎喫茶コーナー

当初は、ガラス越しに通りに面した喫茶コーナーだった。

◎衣料品等の陳列販売

一般商店で売れ残ったものの、価値は落ちていない商品やフリーマーケットで仕入れた商品が、安い価格で販売されている。来客(お年寄り)の楽しみの一つ。

店の前はフリースペースとなっているが、『ばじる』には駐車場スペースが他には無く、現在は駐車場として利用。

◎天井に竹細工の飾り

メンバーが工夫しながら作った竹細工が天井を飾る。店内の広い空間を引き締め、彩りをもたらしている。

◎高齢者・地元住民作品

来店した高齢者や地元住民が寄付した手作り創作物(絵画・写真・人形 etc)が壁面を飾っている。

◎畳敷スペース

15畳の広さの「くつろぎの場」に。様々な事に利用される空間になっていて、健康相談(保健婦さん・在宅介護センター)、講習会(人工呼吸・救命救急)、地域住民ボランティアによる高齢者カウンセリング・運動療法、お茶会、食事、創作活動、その他様々なイベントに。

◎ストーブを囲むソファー

ソファーにくつろぎ、冬の寒い時期はストーブを囲んで温かく心地良い場となっている。

◎キャスター付畳ベンチ

一連の議論・活動にあった「畳のあるところは、居心地が良いね」という声を反映し生まれた。キャスター付で自由な移動で、簡単にレイアウト変更が可能。

◎囲炉裏

畳ベンチで囲炉裏を囲み、なごみの場を醸し出している。骨董品の自在鉤や鉄瓶が、懐かしい雰囲気を出している。「ばじるのS席」と呼ばれ、居心地の良い場所の一つであり、常にお年寄りを含め、来客がたまたず。

◎メッセージ入りの模

縁側サミット開催時に講師の南部さんの毛筆によるメッセージと共に壁を彩る。

◎個性的な手作り作品

中央のテーブルには、色々なイベントやそれに触発された来客の手作り作品(竹細工・小物 etc)が少しずつ増えてきている。

◎ばじるの看板及びメニュー

個性的な看板やメニューの表示が通りにもメッセージを投げ掛けている。入口は全面ガラス張り店内と外との見通しが良い。

図3. 「高齢者こんにに・ばじる」の店舗内の様子

写真3 街中で「畳イベント」の実施
通りに畳が敷かれると様々なことが始まった。宿題を始める子ども達、お茶を披露するお婆ちゃん、七輪を持ち込んで飲み始める大人達等。普段とは違う賑わいの中で、昔の遊びや生活、町の様子等、多世代が繋がる多様な話題が広がった。

写真4 「ばじる」の入り口
既存の空き店舗活用。開口部に今後改善の余地があるが、全面ガラス張り。内部の見通しも良く、メニューや商品が通りに少しづつ滲み出す。人通り少ない商店街に小さいながらも表情を与え始めた。お客の一人が日曜大工で看板等も製作し掲げられる。

写真5 住民の創作活動や作品が店舗を彩る
定例のものから季節の行事に合わせて等、店舗内で行われる各種手芸品等の創作活動も人気だ。又地元の各サークルや個人が携わった作品が店舗内を自在に彩り始めた。プロ級のものや時に貴重な作品も無造作に飾られているところが面白い。

写真6 住民によるメニューづくりや各サービス
手作りの食品が来客に喜ばれている。特に地元ソバ同好会の手打ちソバは本州から来た来客を唸らせるほどの極めて高い評価がある。各種サービスも実施。この日は、(手前から)お茶会、血圧測定とマッサージ、蕎麦づくりが行われている。

写真7 多職種・世代の交流
商品の安さに思わず沢山買いすぎて持ち帰れないお婆ちゃんの手伝いをする若者。自宅まで荷物を届けてあげた後のお婆ちゃんへの感謝の言葉がとて新鮮だったと彼女は言っていた。高齢者はじめ多様な世代・職種が触れ合う場が育まれている。

写真8 お昼の込み合う時間が過ぎゆっくりくつろぐボランティアスタッフ
地元主婦を中心にしたボランティアの協力が「ばじる」の運営を大きく支えている。自由に交わされる世間話も店舗に居心地の良い賑やかさを生んでいる。みな非常に楽しんで、活動に直接関わってくれる人も出始めた。

写真9 ばじるコンクール
今後の活動方向と人材発掘を目的に行われたばじるコンクール。道内各地の多世代から貴重なアイデアが寄せられた。各提案に対して地元住民を中心に和やかな評価とともに、メンバー各人の意識も高めた。さらに町に潜在していた貴重な人材発掘に繋がっている。

効率性・経済性優位の現代的価値観においては「早さ」「新しさ」等が支配するのに対して、「高齢者」の持つ「ユッタリ感・非効率性(=味わい)」「古さ・懐かしさ(記憶)」といった価値観も必要ではないか、とりわけ美幌町のような地方都市におけるまちづくりには、こうした「高齢者」「古い」といった視点から発するスタンス、リズムが重要かもしれないというメンバー間の素直なイメージの共有があった。

加えてコンビニが出来るという「町の小さな事件」に対しても、画一性・利便性ではなく、むしろ「この町にしかない(個性)」「夕方早く閉まる(不便)」といった面も多分に持つコンビニがあって良いのではないかと、即ちコンビニ=便利(Convenience)ではなく、コンビニ=人と人、人とまちを結び合う(Combination, Combine)のコンセプトが掲げられる。

こうした視点はテーマのみではなく一連の活動の諸側面でも他者を巻き込みコトを展開することにも繋がっている。活動の進め方を模索する議論の中で弾んだ「畳」の思い出や居心地の良さから試みられた「畳イベント」は、普段人通りが少ない道路に子どもから大人・お年寄りなど多世代が集う極めて賑やかな場になった(写真3)。あるいは「縁側サミット」(古布を使った創作活動)は自然と参加者の会話と気持ちを弾ませた。これらの行為の中で、普段使われない施設や通り、あるいはお年寄りが話してくれる昔の暮らしや出来事など、ハード・ソフトにわたる町の意外な面白さを再発見・再認識することへ繋がっている。同時に自分達の活動の意義と可能性をメンバーが実感しつつ、こうした賑わいや居心地の良い場を商店街や町全体に延長していくことへの期待など、メンバー間の意識を緩やかに結ぶきっかけの一つになっている。

「ばじる」の活動においては、地域や生活の中にある問題や出来事ゆえに、それらが柔軟に読み解かれるなかで、他者の意識・イメージの共有を促しコトを展開する優れた方向と方法を生成している。

(2) 地方都市独自のスタンス

「高齢者こびに」はあくまで活動のテーマ・視点であるが、そのユッタリ、ノンビリといったリズムは、活動全体の進み方、メンバーの意識・行動の高まり方にも共通するものがあつた。そのことで筆者ら外部専門家は当初、幾度も苛立つ場面があつた(特にネーミングが決まる2001年頃まで)。共に関わったプランナーも、地元住民の認識・主体性が見えない活動当初が最も大変だったと振り返る(表1中、右欄①、以下()内数字は同)。

一方、全体を振り返ると、むしろこうした地元住民の主体性が窺えない時期も必要だったのではないかと、あるいは表面的には窺えないがメンバー各人には日常生活の中で何らかの主体的動機付けがあつたのではないかともある。さらにこうした地方小都市の持つ生活や地域性と呼応する相応しい計画の進め方もあるように思う。

例えば各イベントの開催においても、筆者らの心配とは別に、地元メンバー各人が思い思いにそれぞれの用意をし、結果として上手く行くといったことも多かった。あるいは店舗内の設営においても、筆者ら地区外専門家のアドバイスとは別に、地元住民メンバーは日常的に又日曜大工的にそれぞれが創作を施し、一定の空間の質を生み出している。これらにはある種の地域独自の生活に根付いた、人と人、人とコトの関係が持つ独自のテンポや態度をともなった展開がある。こうしたテンポや態度を含め、地域の独自の「生活」や「場」といったものが持つリズムを計画行為に如何に位置づけ取り

込んでいくかは、経験的な面とは別に、これからの課題の一つでもあると思う。また「ばじる」の活動においては、こうした地方都市独自の生活・場のリズムが、あくまで地元住民が主体的に振る舞うまちづくり展開ゆえに活かされ、店舗開店後も緩やかではあるが持続的発展の方向に向かっている。

(3) 体験と実感ともなう人間発達、まちづくり人の生成

「ばじる」の取り組みにみる大きな示唆と意義の一つは「人が発達するまちづくり」の側面である。活動及び店舗経営は成果を納めつつ順調な展開をみせているが、同時に4(4)に記したように、関わる各人の明らかな人格成長が見られる。

とりわけ当初からのキーパーソンの変容は顕著である。彼は一連の取り組みを振り返りながら、「最初、分からなかった、その時が一番大変だった」と言う⁹⁾。ここでの「分からなかった」とは活動の魅力・可能性・意味に対してである。筆者らの当初コトが展開しないことへの苛立ちはこうした面からも来ている。しかし実験店舗オープンの時、実感として「分かった」、また「これなら行ける」と感じたと言う⁽⁸⁾。あるいは幾つかの視察経験も振り返りながら、「実際自分でやりだしてから(店舗を開設してから)の視察から得るものが大きかった」とも言う。これらの感想には他のメンバーも共感していた⁽⁹⁾。人間発達の上で、又まちづくりの展開において、関わる者の体験・実感ともなう理解が重要であるし、そのことが「ばじる」では段階的に経験されている。

また社会的・個人的な「評価」も各人の成長を強く促進している。今日、活動への取材増加や幾つかの受賞も出てきたが、それらが励みと共に、特にメンバー数人に対しては貪欲に新たな情報を吸収しようとする姿勢を強く刺激している。同時に、自らの理解(=飲み・やり甲斐)を他者に伝えたいという態度が生まれてきている⁹⁾。活動(まちづくり)が人を育み、同時にそうした人が活動を育む、という「まちづくり」と「人」が相互浸透的に向上する回路が生まれつつある。

6. 結び

以上、住民主体によるまちづくり事業の内容について、先の「北の屋台」に続いて、本稿では「ばじる」の活動内容の報告と考察を行った。

幾つか振り返っておこう。一連の活動を通してその都度魅力的なテーマや方法が生成しているが、いずれも地域や生活と連動したものであり、地元住民を中心にしつつ地区外の専門家・プランナーも交えた創造的議論・実践が持続的に経験されている。また思い出・記憶といったことも関わる各人のイメージの触発、認識の共有を促していた。活動を通じて各人のまちづくり人としての成長がみられたが、それは視察や体験による実感ともなう認識、組合結成や自らの実践による責任と自覚の形成、社会的・個人的な評価等によるところが大きい。また活動に多様な仲間が紡ぎ出されてきているが、状況を見定めた各種イベントの展開と、一方で日常の会話・ロコミでの誘いや説明の双方による効果である。その中で、まちなかの活性化と共に地域に根ざし自律したコミュニティが生まれつつある。

最後にこうした「ばじる」の今後の課題を幾つか記しておきたい。

一つは、地元行政の認識は未だ厳しい状況がある。「ばじる」活用による行政サービスの有効性、住民のたまり場としての意義と価値を、対外的な評価から知りうるのではなく、地元内部から把握し支援する姿勢をもたらしたい。

二つめに、住民にとって心地よいコミュニティ生成の場として「ばじる」が育まれてきているが、活動の意味・意義に対する認知度を高めるための情報発信は未だ必要である。特に、対外的評価に比べ上記行政評価のように地元内部の認識は十分ではない面もある(ただ、5(2)で記したように、地方都市独自の緩やかなテンポでの浸透があるのかも知れない)。これらについて、地域の実情に即した実感のある情報発信を持続的にやっていく必要もあろう。

三つめに、運営面において現段階で活動は維持できる状況が出てきたものの、それはボランティアスタッフの行為に支えられている面が大きい。経済的にもより自立しうる運営展開が必要であるが、しかし一方で、ボランティアに支えられてこそ維持し得る運営の方向・方法にも意義はあると思う。その為にも、ボランティア、来客、住民達みんなの、より濃密な実感と意義を分かち合う愉快的運営展開をさらに繰り広げる必要もあろう。

今後も引き続き、活動、人、町・地域の発達の様相を参画しながら観察していきたい。

<補注及び参考文献>

- *1 倉原宗孝、まちなか活性化・まちづくりに向けた市民主体による事業への取り組みに関する考察—帯広市「北の屋台」を通じて—、日本建築学会技術報告集・第16号、2002.12、pp.303-308
- *2 視察者等は少しずつ増え現在、道内外から30件・延べ500人程が訪れている。こうした視察者の対応には時間・労力がかかり、「北の屋台」(補注*1)と同様に一定の金額を徴収するようになった。しかし中には「単なる観光客のような議員さん達もいる、むしろちゃんとした人達との出会いが嬉しい」と言ったこともメンバーは語っている。一方こうした発言には、活動やまちづくりに対するメンバー自身の意識・自信・誇りの高まりが読みとれる。
- *3 近年、美幌町の駅前には再開発により近代的に整備された。しかし人通りは極めて少ない。空洞化が進む町の状況やこうした整備に対して、「ばじる」は、この町で最も人口密度が高いところ」という発言が住民・各関係者の数名から聞かれた。筆者も同感するし、また過疎化・空洞化が進むこの町において「ばじる」の賑わいは特筆に値すると思われる。
- *4 「まちづくり人」とは、「身近な環境の管理・改善・整備をはかることに機会があるごとに関わり、ハード・ソフトの環境づくりに生きがいを見いだし、知らず知らずのうちに他者にもその方向に向かわしめる気持ちを育てる人」をいう(延藤安弘、横山俊祐:公営住宅更新計画のパラダイム転換—住み手参加方式の方法論的意義と進め方の構想,住宅,1991.6.p12)。まちづくり・コミュニティ形成に関わることを暮らしの一部として吸収しつつ、その現場を舞台に自らの自己実現を表現していくことは、これからの市民が向かうべき一つの方向といえる。
- *5 後日、これらコンクールに参加した数人はメンバーと共にに行った先進地視察に強く触発され、そのうちの一人の女性は町に対して「私が旅費を出してあげるから、ぜひ町長にも一緒にこうした活動に学んで欲しい」といった手紙を出した。
- *6 拙稿では、ここで対象とする「ばじる」と同様、まちなか活性化・まちづくりを目指した「北の屋台」(帯広市)の事例を通じて、住民主体によるまちづくり及びそれに関わる事業を展開していくために、次の13の要件を示した。即ち、1.関わる者の姿勢、2.多くの議論・経験の蓄積、3.開かれた議論と活動、4.柔軟な思考と行動、5.失敗をバネにする、6.地域内外への積極的情報発信と受信、7.活動の主旨に共感・期待を持つ報道人、8.多様な人材からのメンバー構成、9.信頼ある「事務局」の存在、10.行政・商工会議所の参加、11.補助主体・事業主体側の理解・評価し得る人材、12.外部専門家・プランナーによる触発、13.培われた土地と暮らしの記憶を活動と未来に読み込む、である(補注*1)。
- *7 こうした「老い」の視点からみたまちづくり・計画行為は今日、重要な意義と可能性を持つと思う。これらについては別途まとめる予定である。またその一部については、倉原・他、「老いの視点」を地域に拓くまちづくりの実践的研究、高齢者問題研究No.19、北海道高齢者問題研究協会、2003、pp.79-100、等で示した。
- *8 彼は毎回の会議の後、家に戻って奥さんに「なぜ、あの人達(筆者ら外部専門家)はあんなことを言うのだろう、それが分からないことがすごく悔しい」と愚痴をこぼしていたと後日語ってくれた。
- *9 一住民であるキーパーソンの一人は、近年の筆者らとの雑談においても研究者のようにメモを取る姿が印象的である。また視察者への対応や講演では心のこもった語りでまちづくりへの貴重な認識を強く発している。さらに従来プランナー任せだった補助メニュー調査も独自に遂行しつつアドバイスを受けながらも自ら各種補助・支援等を獲得するようになっている。

[2003年10月20日原稿受理 2004年2月23日採用決定]